『同志社大学　日本語・日本文化研究』 第 21 号　pp. 1 － 17（2024. 3）

副詞「はたして」「やっぱり」「案の定」「図らずも」「意外に」「事実」「実際」「現に」に関する考察
A Study on the Adverbs“Hatashite”,“Yappari”, “Annojyo”,“Igaini”,“Jijitsu”,“Jissai”,“Genni”

原田　朋子

要　旨

本稿では、自然談話である話し言葉において、承前性を持つ副詞①「はたして」、「やっぱり」、「案の定」、「図らずも」、「意外（に／と）」と、②「事実」、「実際」、「現に」について、会話コーパスやアンケート調査により、それらの使用傾向や互換性を分析・考察した。

これらの副詞は、事態の成立に何らかの原因や根拠が前提としてあり、前提と当の事態との関係を規定する副詞である。あえて分けるとすれば、①予期や反予期において使用される類と、②事実性においてことがらを規定する包摂系の副詞の類に分けられるが、「やっぱり」は①においても②においてもどの表現とも互換性が高く、汎用性も高いことを明らかにした。また、「事実」、「実際」、「現に」の類は、全体的にアンケート結果の点数が高く、特に「実際」を中心として、3 つの表現の中で相互の互換性が高いことが分かった。

アンケートでは、「やっぱり」と「実際」の使用傾向が極めて類似しているにも関わらず、『名大会話コーパス』の中では「実際」よりも「やっぱり」の方が極めて多くみられ、実際の会話（自然談話）では「やっぱり」が多用されている実態が明らかになったが、その要因は「やっぱり」の互換性の高さや汎用性の高さによるものであるということを指摘した。

キーワード

日本語　副詞　話し言葉　承前性

1　はじめに

原田（2023）では、話し言葉における接続表現の中で、元来の意味・機能を有して接続表現らしく振る舞うものと、元来の意味・機能から逸脱して曖昧になり、フィラー化するものを段階的に並べた。また、「でもやっぱり」のように、「でも」と「やっぱり」が連続して使用されている用法を見出し、「でも」は前件を受けて後件をつないでいくという関係性に優れた接続表現であり、副詞としての「やっぱり」は承前性を併せ持つものであることを指摘した。

本稿では、「やっぱり」[1]と同様に、川端（1983）で挙げられている承前性を持つ副詞に着目し、「はたして」、「案の定」、「やはり」、「図らずも」、「意外にも」と「事実」、「実際」、「現に」の使用頻度や互換性について考察することにより、話し言葉の中での使用実態を明らかにするとともに、自然談話の中で多用されている「やっぱり」とその他の承前性を持つ副詞との違いを意味や用法から明らかにすることを目的とする。

2　本研究で取り上げる副詞について

筆者は、原田（2021、2022）で話し言葉における「やっぱり」のフィラー化の現象を指摘したが、本研究では、川端（1983）に挙げられている「はたして」、「やはり」、「案の定」、「図らずも」、「意外にも」と「事実」、「実際」、「現に」などのような承前性を持つ副詞を対象とし、「やはり」とそれらの中での違いはないか、明らかにしたい。

川端（1983）は、これらの副詞について、以下のような例文を挙げ、これらの副詞は、個別としての当の事態の成立が、その原因・根拠として前提される何かによって規定される関係を意味するとしている。

①この冬は<u>はたして</u>雪が深かった・やはり・案の定／図らずも・意外にも
②<u>事実</u>猪を素手で殺すやうなことをした・実際・現に

また、川端（1983）は、上記の①は予期や反予期において、②は事実性においてことがらを規定する包摂系の副詞であるが、それに自閉せぬ、前提の存在が了解されるとしている。

3　テキストマイニングによる分析

3.1　分析対象とテキストマイニングのツールについて

本研究の分析対象の副詞の抽出には、原田（2023）と同様に『名大会話コーパス』[2]を使用した。同コーパスは、日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスであり、129 会話、総字数 2,017,338 字にも及ぶ。『名大会話コーパス』を使用する理由は、同コーパスが例えば国会議事録のように予め原稿が用意されているような話し言葉でもなく、ドラマや劇中の会話の台詞のように台本があるような話し言葉でもなく、完全な自然談話であるためである。話し言葉と一口に言っても、スピーチ原稿や台本が元になった話し言葉は、ある程度推敲された文章を元に話されており、無意識のうちに使用される副詞の傾向は捉えにくいのではないかと考える。

対象の副詞の頻度集計では、テキストマイニングによる分析を行った。テキストマイニングを実行するには、障害となる記号やルビや注釈等を一旦削除（データクリーニング）する必要がある。また、原田（2023）と同様に、本研究においても、テキストデータの抽出や集計に、金明哲氏によって開発された MTMineR（Multilingual

Text Miner with R）というテキストマイニングツールを用いた。MTMineR は、テキスト型データを構造化して集計し、R[3] を用いて統計的に分析するソフトウェアである。

3.2　出現頻度に関する分析結果

前節の手続きの次に、全てのテキストデータの中から本研究に必要な表現を抽出した。そのために、まずは MeCab により分析対象全体に対して形態素解析を実行した。MeCab はオープンソースの形態素解析エンジンであり、MTMineR にも標準装備されている。次に、先に述べた副詞「はたして」、「やっぱり」、「案の定」、「図らずも」、「意外に／と」[4] と「事実」、「実際」、「現に」を検索抽出した。抽出に際しては、MTMineR の KWIC 機能を使用した。KWIC により抽出し、集計したものが図 1 である。

図 1 のとおり、全会話中から抽出された対象表現は、「やっぱり」が 2,141 例と突出して多く、次に「実際」が 128 例、「意外に / と」が 67 例、「はたして」が 4 例、「事実」と「現に」が 1 例ずつ見られた。一方、「図らずも」と「案の定」については『名大会話コーパス』の中では全く抽出されなかった。川端（1983）では、「はたして」、「やはり」、「案の定」、「図らずも」、「意外にも」のように、先に挙げた例文①は、先行文と当の文の間に、事態相互の原因結果関係が成立し、原因から予期的に類推される結果の実現或いは非実現を、その副詞は意味するとされており、「事実」、「実際」、「現に」のような②の類も基本的に①に同じであるが、差を言えば、先行のことがらが当の文のそれに対して包括的な根拠をなすであろうと述べられている。

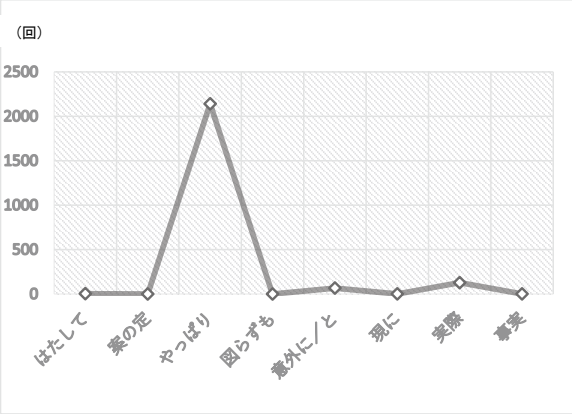

図 1　対象表現の出現回数

図 1 の①の類のみを取り出し、予期と反予期の二つの意味に分けると、「やっぱり」は、双方の意味を表し得るため、「はたして」、「案の定」と「図らずも」、「意外に／と」の中間に位置し、図 2 のように、頻度で言えば、言わば二等辺三角形の頂点に位置する。これは、自然談話の中では、「やっぱり」が他の追随を許さず、突出

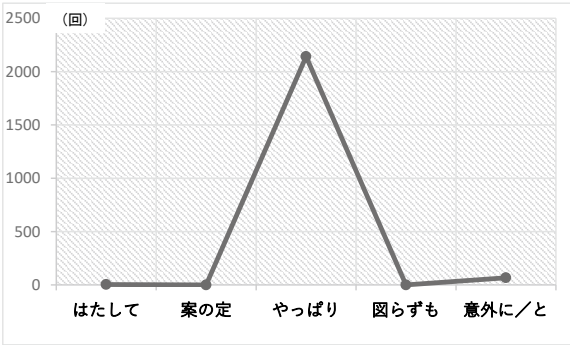

図 2　対象表現の出現回数（①のみ）

して使用されているからに他ならないが、このことは何を意味するのだろうか。何故そのような頻度の差が生じているのだろうか。これらのことを究明するためにも、次章では、アンケート調査により、「やっぱり」と「はたして」、「案の定」、「図らずも」、「意外に / と」、「事実」、「実際」、「現に」の互換性を見ていく。

4　アンケート調査による分析

4.1 アンケート調査の方法

本章では、「はたして」、「やっぱり」、「意外に／と」、「事実」、「実際」、「現に」を含む会話を『名大会話コーパス』の中から 50 会話抜き出し、会話中の対象表現の箇所を空欄にして、その空欄箇所に対して「はたして」、「やっぱり」、「案の定」、「図らずも」、「意外に／と」、「事実」、「実際」、「現に」の各表現が「適さない」、「あまり適さない」、「まあまあ適している」、「適している」のいずれかを選択する方法で実施した。アンケートの回答にはインターネットの Web 上で回答できる Google Form を用いた。なお、アンケートには文体の硬さ、つまり、該当する会話と各対象表現との間の文体差は問わないと注釈を付け加えた。

4.2　アンケートの被験者と人数

アンケートの被験者は、国内に居住する日本語母語話者で、20 代後半 2 人と 30 代 2 人と、40 代、50 代、60 代、70 代のそれぞれにおいて 3 人ずつ、計 16 人である。被験者の背景は、元国語教師、元 / 現会社員（事務職、営業職）、新聞記者、美容関係従事者、主婦など、多岐にわたる。

4.3　アンケート結果について

各会話の対象表現毎に「適さない」、「あまり適さない」、「まあまあ適している」、「適している」の 4 区分で回答のあったものを、「適さない」＝ 1、「あまり適さない」＝ 2、「まあまあ適している」＝ 3、「適している」＝ 4 として点数化し、統計処理を行った。

16 人のアンケート結果を集計し、各会話文の対象表現毎に平均値を算出したものが表 1 である。

表１　アンケート結果集計の平均値

会話文No.	はたして	案の定	やっぱり	図らずも	意外に／と	事実	実際	現に
1	1.4	2.4	***3.8***	1.5	2.4	2.5	3.4	2.4
2	1.3	1.4	1.8	1.4	***3.6***	1.9	2.4	1.6
3	1.2	2.4	2.6	2.3	2.6	3.8	***3.9***	3.8
4	1.2	2.7	***3.1***	1.8	2.1	3.4	3.6	3.6
5	1.1	1.3	***3.7***	1.4	1.4	2.9	3.0	2.3
6	1.1	2.6	***3.1***	2.1	2.6	2.7	2.9	2.4
7	1.1	2.4	***3.4***	1.6	1.3	1.4	1.9	1.6
8	1.2	2.3	***3.4***	1.5	2.3	3.0	3.3	2.6
9	1.4	2.9	2.9	2.1	2.7	2.8	***3.4***	2.5
10	1.3	1.6	***4.0***	1.3	1.5	2.8	3.4	2.6
11	1.6	1.9	***3.6***	2.0	2.9	3.0	3.6	3.3
12	2.1	2.4	***3.5***	1.4	2.9	3.1	3.4	2.8
13	1.2	1.5	3.6	1.5	2.2	2.9	***3.9***	2.9
14	1.2	3.1	***3.6***	1.4	1.6	3.4	3.8	3.5
15	***3.3***	1.8	3.1	1.9	1.9	3.0	3.7	2.9
16	2.1	1.7	3.8	1.4	1.9	2.9	***3.6***	2.4
17	1.2	1.9	3.0	1.7	***3.6***	2.6	3.3	2.2
18	1.6	1.4	***3.1***	1.4	2.4	2.8	2.9	2.7
19	1.4	2.3	***3.8***	1.8	1.8	2.7	3.1	2.5
20	1.4	1.8	***3.7***	1.4	1.6	2.4	3.2	2.5
21	1.1	1.6	3.8	1.6	***2.3***	3.1	3.4	3.1
22	1.2	1.8	2.5	2.0	***3.3***	2.3	2.6	2.9
23	1.7	3.1	3.3	1.4	1.9	3.4	3.5	***3.4***
24	1.7	2.4	***3.3***	1.8	1.8	2.8	3.3	3.3
25	1.3	2.6	***3.9***	1.7	2.3	3.0	3.1	2.9
26	1.4	1.8	***3.7***	1.4	2.1	2.9	3.6	3.1
27	1.7	1.6	***3.7***	1.9	2.4	3.1	3.4	3.2
28	1.7	1.7	***3.8***	1.5	2.1	2.9	3.5	2.4
29	1.1	1.3	***3.5***	1.4	2.5	2.3	2.3	2.1
30	1.1	1.9	2.5	1.6	1.7	2.3	***3.6***	2.6
31	1.9	2.0	***3.3***	1.5	2.9	2.9	3.8	3.1
32	1.5	1.8	***3.4***	1.4	1.9	3.5	3.8	3.7
33	1.8	1.8	***3.8***	1.6	1.8	2.8	3.6	2.6
34	2.1	2.7	***3.7***	1.6	1.9	3.4	3.8	3.3
35	1.4	2.4	***3.7***	1.6	2.7	3.1	3.8	3.3
36	1.5	3.6	***3.9***	1.8	1.6	3.3	3.7	2.8
37	1.4	2.2	2.7	1.6	***3.1***	2.6	3.4	2.8
38	1.4	1.8	1.9	2.4	***3.7***	2.3	2.5	2.3
39	1.6	2.1	***2.4***	1.6	2.5	2.4	3.3	2.9
40	1.6	2.7	***3.6***	1.4	1.6	3.3	3.8	3.5
41	1.3	3.0	***3.8***	1.4	2.2	2.9	3.1	2.9
42	1.3	1.5	2.8	1.4	3.3	2.4	***3.4***	2.1
43	***3.4***	1.6	2.8	1.6	2.3	2.8	3.6	2.8
44	1.5	2.6	***3.6***	1.9	2.1	2.8	3.4	3.1
45	1.5	1.8	3.4	1.5	1.7	3.0	***3.9***	3.1
46	1.3	1.4	3.1	1.4	2.0	***2.9***	3.6	3.3
47	2.3	1.7	3.8	1.4	1.8	2.9	***3.8***	3.0
48	1.5	1.6	***2.3***	1.5	1.9	2.4	3.3	3.0
49	1.2	1.8	***3.6***	1.4	1.5	3.0	3.6	3.1
50	1.3	1.9	3.2	1.8	***2.0***	2.9	3.8	3.2

表1で太斜体字のものは、『名大会話コーパス』の元の会話で使われていた表現であり、網掛けしたものは、アンケート結果の平均値が 3.0 以上であった表現である。本分析では、アンケートの回答について、「まあまあ適している」＝ 3、「適している」＝ 4 としていたことから、平均値が 3.0 以上の表現を適している表現として扱うものとする。表 1 でアンケート結果の平均値が 3.0 以上であった表現と『名大会話コーパス』の元の会話で使われていた表現の数をさらに集計したものが表 2 である。

表２　アンケート結果で適している表現となった回数と
『名大会話コーパス』で使われていた回数

	はたして	案の定	やっぱり	図らずも	意外に／と	事実	***実際***	現に
アンケート結果で3.0以上の表現が使われていた回数	2	4	39	0	6	18	43	21
『名大会話コーパス』の会話で使われていた表現の回数	2	0	31	0	7	1	8	1

表 2 では、『名大会話コーパス』の中で使われていた表現は、「やっぱり」が 31 回と最も多く、「実際」が 8 回、「意外に／と」が 7 回、「はたして」が 2 回、「現に」と「事実」はそれぞれ 1 回であり、「案の定」と「図らずも」については『名大会話コーパス』中に出現しなかったため 0 回となっている。一方で、アンケート結果で 3.0 以上あったものは、「実際」が 43 回、「やっぱり」が 39 回、「現に」が 21 回、「事実」が 18 回、「意外に／と」が 6 回、「案の定」が 4 回、「はたして」が 2 回、「図らずも」が 0 回という結果であった。「図らずも」については、コーパスでもアンケート結果でも使用例がなく、コーパス作成時にコーパスの参加者であった 10 代後半から 90 代と本研究のアンケートの被験者 20 代後半から 70 代の被験者の話し言葉における使用語彙としてはほぼない表現である可能性が高い。

「はたして」は、川端（1983）の①のような用法ではなく、「はたして彼はくるかどうか」のような、助詞「か」との呼応において疑問の副詞へ固定的に転身した用法としての使用例が見られたのみであった。「案の定」や「やっぱり」のように、予想通りである意を表す用法の「はたして」は、コーパス参加者、アンケートの被験者の使用語彙には認められなかった。

「案の定」はコーパス参加者の使用例は 0 回だったにも関わらず、アンケート被験者の回答には、「適している」、「まあまあ適している」という回答が次のような＜会話 9 ＞でわずかに見られた。

＜会話 9 ＞

(1) B：留学前はすごい勉強も大変だし、そんな遊んでるところじゃないとかすごい釘さされて行ったのに、行ったら<u>○実際（×はたして、△案の定、△やっぱり、△図らずも、△意外に／と、△事実、△現に）</u>[5] 遊んでばかりいて。

A：ふーん。そうなんだ。

なお、コーパスの参加者は該当箇所に「実際」を使用しており、他のアンケート被験者は「やっぱり」、「事実」、「実際」、「意外に／と」を「適している」ないしは「まあまあ適している」と選択している回答が多かった。コーパスとアンケート結果の差に言及すると、本分析のコーパスの集計数は、自然談話の中での使用例を集計したものであるが、アンケートの方は、その自然談話を文字化したテキストを被験者が目で見て回答を選択している。そのため、被験者が「案の定」を選択したからといって、実際に自然談話の中で使用する表現だとは必ずしも言い切れない。つまり、文字化されたテキストを被験者が目視し、ある程度の時間をかけて意識的に意味を考えると、「適している」と判断されたものがあったとも考えられる。

一方で、「実際に」、「現に」、「事実」はコーパス上の出現回数と異なり、被験者が選択した回答数が多かったのも特徴的であった。

次に、川端（1983）の①と②の分類に従い、上述の表現を２つのグループに分けて見てみると、①の「はたして」、「案の定」、「やっぱり」、「図らずも」、「意外に／と」の類では、「やっぱり」の使用頻度が非常に多く、また、「やっぱり」は予期の意味を持つ「案の定」にも、反予期の意味を持つ「意外に／と」にも置き換えが可能であることが分かった。一方、②の「事実」、「実際」、「現に」の類は、全体的にアンケート結果の点数が高く、特に「実際」を中心として、３つの表現の中で相互の互換性が高いことが判明した。

4.4　相関関係に関する考察

次に、アンケートの各会話の対象表現毎の平均値を散布図で示したものが図３である。このグラフは、各表現がその会話の文脈に適しているか否かの回答の平均値を点の位置で表すものであるが、その点を線で結び、各々の線の軌跡を比べることにより、各表現間の相関関係を見出すことができる。グラフ上で上部にあればあるほど出現回数が多いことを表し、また、軌跡が類似している表現は同じような使われ方をしている。つまり、軌跡が類似している場合には、該当の表現は置き換えが可能となることを意味している。

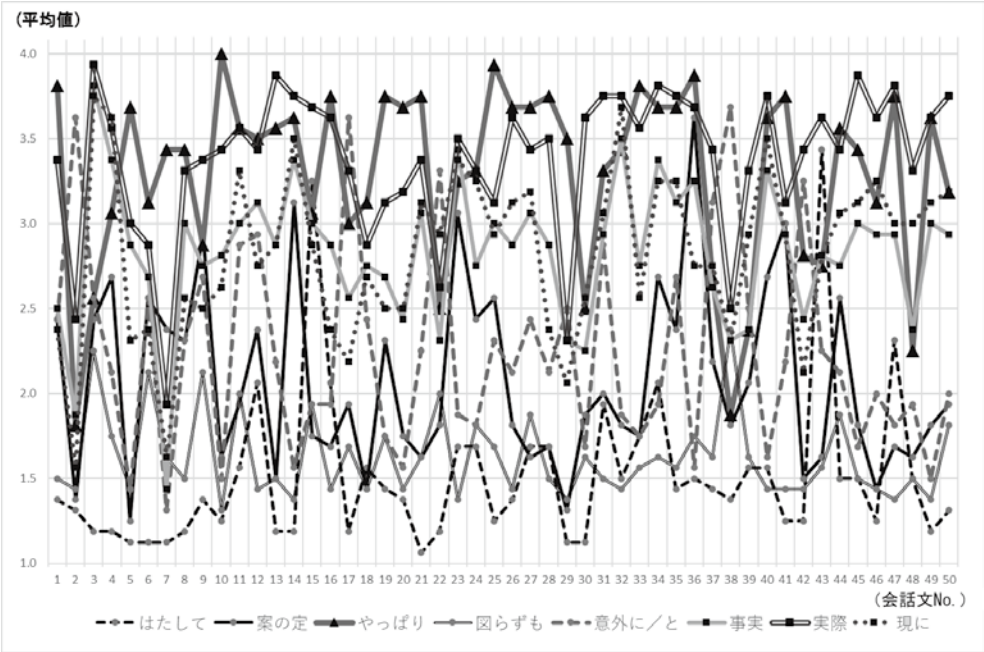

図３　アンケート結果による対象表現の相関関係

さらに、出現回数が多い「やっぱり」と「実際」の相関関係を示すために、両表現のみの散布状況を表したものが図４である。

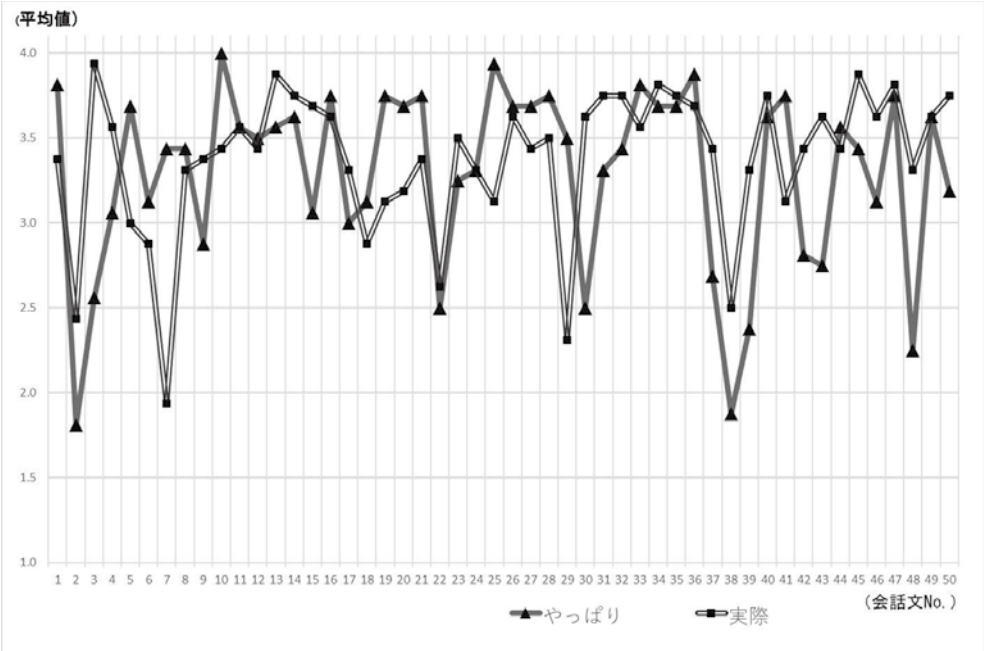

図４ 「やっぱり」と「実際」の相関関係

図４では、「やっぱり」と「実際」の折れ線形状が重なって表れているところが多く、使用実態が極めて類似していることが分かる。『名大会話コーパス』の中では、「やっぱり」が 31 回出現している一方で、「実際」は８回しか現れていない。このことから、会話文と言えども、アンケートのように文字化されたテキストを目視して、適した表現を選択する場合には、意味的に適合する「実際」を選択するが、実際の会話（自然談話）では「やっぱり」を使用する傾向が高いということが窺える。いずれにしても、「実際」は「やっぱり」との互換性が高く、コーパスでは「やっぱり」が優勢であるため、自然談話では「実際」に「やっぱり」が取って代わって使われているのではないかと思われる。

以下に、被験者により「やっぱり」と「実際」を、ともに高い適応性があると選択された会話文の一例を挙げる。

＜会話 33 ＞

A：例えば、ま、どこか海外に、私は２年も留学したことはもちろんないんで、（うん）ねー、行ったとしてー、はたして、＜笑い＞そこからまた大学に４年間行くなんていうのは。うん、だから、でも◎やっぱり（×はたして、×案の定、×図らずも、×意外に／と、△事実、◎実際、△現に）、もうちょっと、ねー、短い時間で大学に入れるようになればいいのかなーなんて思ったりもしますけど。

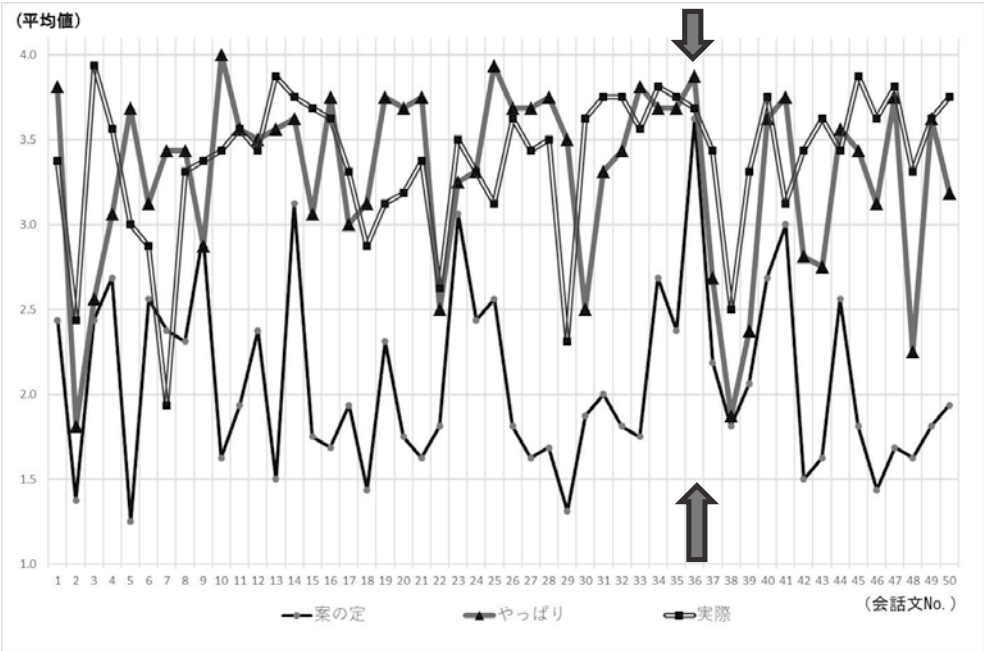

図５ 「案の定」と「やっぱり」と「実際」の相関関係

図 5 は「案の定」と「やっぱり」と「実際」の相関関係を示したグラフである。上下の矢印は下記の＜会話 36 ＞の場所を示している。矢印の箇所以外でも、「案の定」の値が高い会話文において、「やっぱり」も「実際」も値が高くなっており、これら 3 表現の互換性も高いことが窺える。

＜会話 36 ＞では、話者 A が「やっぱ」を使用していたが、被験者は「やっぱり」の他にも「案の定」、「実際」を選択した例である。

＜会話 36 ＞

A：いきなり何かさ、テレアポのバイト始めて、エステの機械を売る、そうそうそう、そしたら結局だからあなたがこの機械のよさわからなくってどうするのみたいなこと言われて、すごい、そこでまた勧誘受けて、何か、のみこんでまったんて、それを。あ、絶対欲しいとか思って、30 万。

B：まじでー。

A：でさー、私絶対買うとか言い出して。で、契約しちゃったんだって。で、私は絶対それはやめた方がいいよ、おかしいよどう考えてもって、それ悪徳だよーとか言ってたら、結局◎やっぱ（×はたして、◎案の定、×図らずも、×意外に／と、○事実、◎実際、△現に）そうで、お父さん出てきてさ、クーリングオフしてさ。

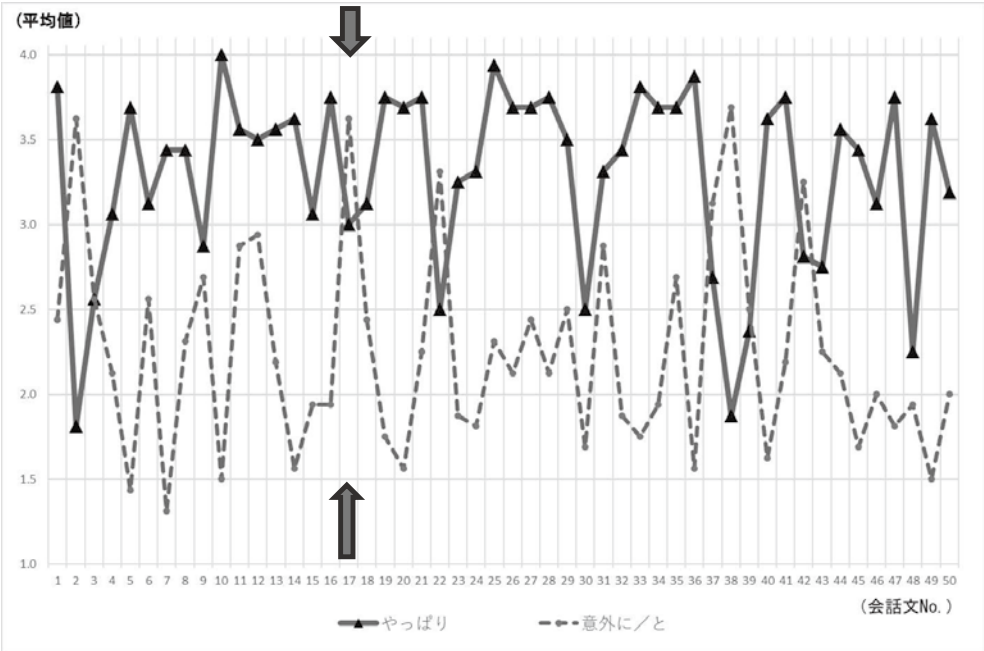

図６ 「意外に／と」と「やっぱり」の相関関係

図 6 は、「意外に／と」と「やっぱり」の相関関係を示したグラフである。先行のことがらや話者の心の内での前提は表面化されているとは限らず、また、「意外に／と」

は反予期、「やっぱり」は予期も反予期も表すため、折れ線の形状は、被験者が前提から予期的に類推した結果が実現したと文脈から判断した場合には、＜会話 2 ＞や＜会話 38 ＞のように「意外に／と」と「やっぱり」が異なる軌跡を描いている。その反対に、被験者が前提から予期的に類推した結果が実現していないと判断した場合には、グラフ中に矢印で示した＜会話 17 ＞のように似通った値を示しており、「意外に／と」と「やっぱり」との間の互換性が高くなっている。次のような例文の場合である。

＜会話 2 ＞

A：すごい、シュークリーム作る人いるのね。

B：このねえ、あの、

A：皮が難しいっていうじゃない。

B：そうだね。

A：シュークリームの。

B：でもね、途中でねえ、オーブンのふたを開けなければ◎意外に（×はたして、×案の定、×やっぱり、×図らずも、×事実、△実際、×現に）平気だよ。途中で開けると、なん、結構つぼ、しぼんじゃうの。

＜会話 38 ＞

A：あ、でも私は、だから、とにかく、あの、スキーの荻原健司の顔が好きだからー。

B：えー、そうなのー。あー、◎意外に（×はたして、×案の定、×やっぱり、△図らずも、△事実、△実際、△現に）地味なところ行ったから、ちょっと驚いちゃった。

A：いや、何かねー、でもね、好きな、顔が好きなだけで、別にああいう、実際好きになると、あんな顔してたら好きにならないけど。

＜会話 17 ＞

A：でも最近ねー、P 大学のあたりで、夜、変な人が（あ、ほんとに）出るみたい。

B：前もちょっと一時期あったよねー。事件があったよねー。

A：うん。

B：出るんだ。

A：最近もまたなんかあの、お金とられたとか、（あ、ほんとに）そういう話が、なんか若者 2 人で。

B：キャンパスねー、◎意外に（×はたして、×案の定、○やっぱり、×図らずも、△事実、○実際、△現に）盲点だよね。

A：そうだねー。（ねー）学生も襲われたみたい、留学生が。

B：ほんと？

A：うん。

B：怖いねー。

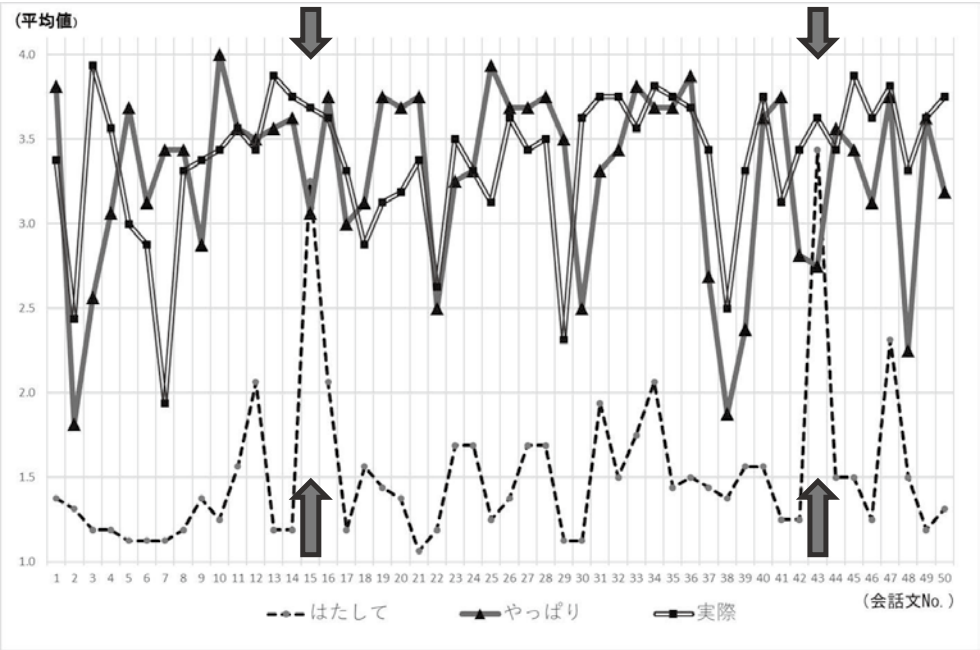

図７ 「はたして」と「やっぱり」と「実際」の相関関係

図７は､「はたして」と「やっぱり」と「実際」の相関関係を示したグラフである。「はたして」については、全体的に「適している」と判断された数値が低いが、上下の矢印の示している＜会話 15 ＞と＜会話 43 ＞については､「はたして」､「やっぱり」､「実際」の値が比較的高く、被験者により、これら３表現の互換性の高さが示されたものである。

＜会話 15 ＞

A：これ翻訳どうやってやっていいかっていう。

B：ええ。

C：え、翻訳難しいですね。

A：難しいですよ。

B：ええ。

A：たとえできたところでね､○はたして（×案の定､○やっぱり､×図らずも､×意外に／と､○事実､◎実際､△現に）100％ね､意図がその原語で､ね､オリジナルで伝えるのが伝わってるかというと、伝わらないと思いますね。

B：いやだって、イディオムの後ろはものすごくいろいろな、ねえ、背景があるわけだから。

A：そうです。

＜会話 43 ＞

A：あっそう、骨盤は、最近骨盤矯正のやつ、毎日うちで寝る前にやっとる。

B：あっ、ほんとに？

A：これに書いてあったやつ。これじゃないか、1個前のやつ。

B：あったね。

A：それを毎日やっとる。○はたして（×案の定、△やっぱり、×図らずも、△意外に／と、△事実、◎実際、△現に）効果は出てるのかしらんけど。

B：出た？

A：わからん。

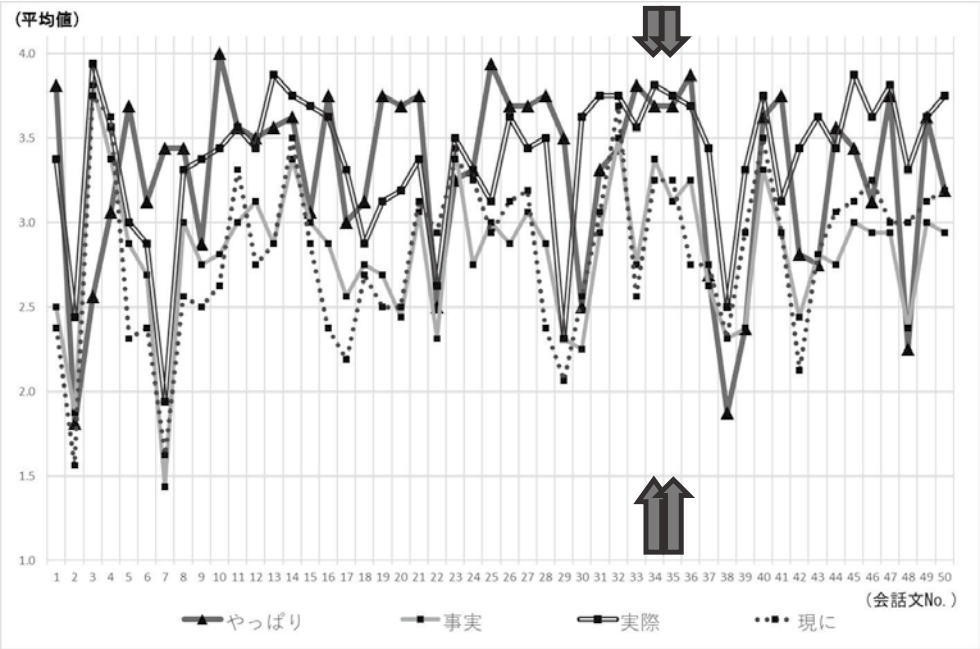

図８　「やっぱり」と「事実」と「実際」と「現に」の相関関係

図８は、「やっぱり」と「事実」と「実際」と「現に」の相関関係を示したグラフであり、上下の矢印は＜会話34＞と＜会話35＞の場所を示している。図８において、「やっぱり」と「事実」と「実際」と「現に」のグラフの軌跡は似ており、「やっぱり」が川端（1983）の②の類とも互換性が高いことを図８の相関関係からも証明している。

以下のコーパスの会話の例では、「やっぱり」を使用していたが、「やっぱり」の他にも被験者からは「実際」、「事実」、「現に」が高い頻度で選択された例である。

＜会話34＞

A：あ、そして、その泥湯ってねー、一番最初ね、入ったときはもうなんか下がさ、気持ち悪かったけど、何しろYさん入ってくから入ってったんだけど。

B：泥水になってるの？

A：もう、し、下が

B：下がぬるぬる？

A：ネズミ色。

B：あー。

A：うん。

B：そいで水は？お湯。

A：見えないもん。

B：あー、じゃ、◎やっぱり（△はたして、△案の定、×図らずも、×意外に／と、○事実、◎実際、○現に）全部濁ってるわけ？

A：そう。

＜会話 35 ＞

A：人気ないんでしょ、ユーロディズニーって。

B：うーん。あのねー、◎やっぱり（×はたして、△案の定、×図らずも、△意外に／と、○事実、◎実際、○現に）フランス人ってさー、アメリカ人に対して、すっごいライバル心があるんだって。（＜笑い＞）めちゃくちゃ。

A：うん。

B：だからねー、こう一般的に、アメリカの、作り出すものは好きじゃないからさー、だから、うん、むしろフランス人よりもね、周りのーヨーロッパの国の人たちに人気っていう感じで。

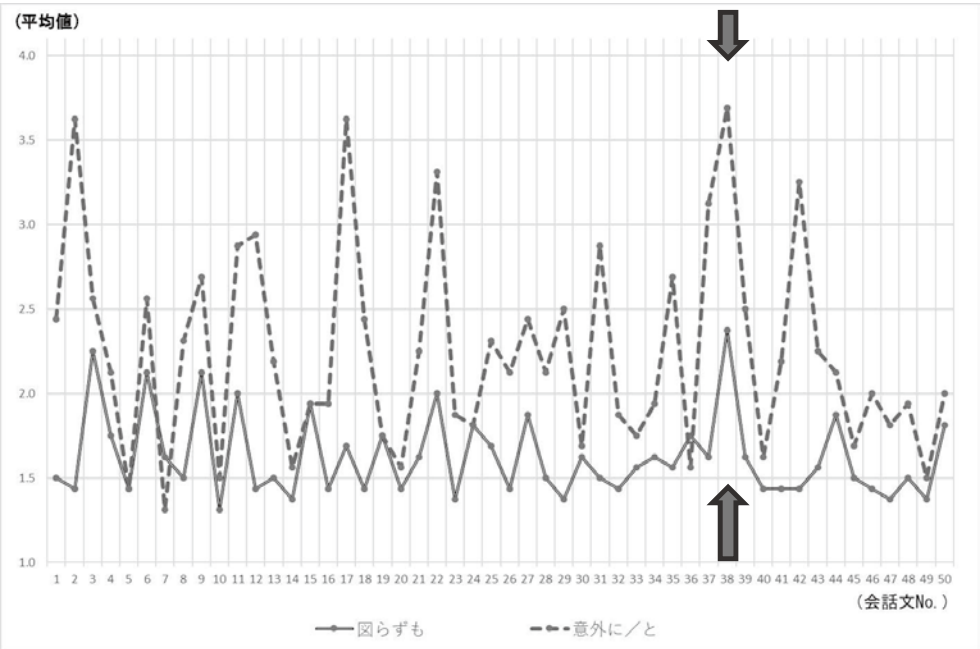

図９ 「図らずも」と「意外に／と」の相関関係

図９は、「図らずも」と「意外に／と」の相関関係を示したグラフである。上下の矢印は＜会話 38 ＞の場所を示している。図９から、「図らずも」の値が全体的に極めて低く、＜会話 38 ＞のように、意味が適合すると思われる会話文でも被験者からは「意外に／と」が選択されていることから、話し言葉における使用頻度が非常に低いことが読み取れる。

＜会話 38 ＞

A：あ、でも私は、だから、とにかく、あの、スキーの荻原健司の顔が好きだからー。

B：えー、そうなのー。あー、◎意外に（×はたして、×案の定、×やっぱり、△図らずも、△事実、△実際、△現に）地味なところ行ったから、ちょっと驚いちゃった。

A：いや、何かねー、でもね、好きな、顔が好きなだけで、別にああいう、実際好きになると、あんな顔してたら好きにならないけど。

以上のことから、「はたして」、「案の定」、「図らずも」、「意外に／と」の①の類においても、「事実」、「実際」、「現に」の②の類においても、自然談話の話し言葉の中では「やっぱり」が使用されることが多くあり、「やっぱり」は①②両グループに使用可能で汎用性の高い副詞であると言える。

5　考察と結論

本研究の分析から、自然談話の話し言葉で使われる「はたして」、「やっぱり」、「案の定」、「図らずも」、「意外（に／と）」、「事実」、「実際」、「現に」について、考察結果を以下にまとめる。

(1)『名大会話コーパス』の全会話中から抽出された対象表現は、「やっぱり」が突出して多く、次に「実際」、「意外に / と」が見られた。一方、「図らずも」と「案の定」についてはこのコーパスの中では全く使用されていなかった。

(2) アンケート調査の結果では、「まあまあ適している」以上の使用頻度であったものは、「実際」と「やっぱり」が非常に多く、「現に」、「事実」も比較的多く見られた。「図らずも」については、コーパス参加者にも、アンケートの被験者にも使用語彙としてほとんどない表現であった。

(3)「はたして」は、「案の定」や「やっぱり」のように、予想通りである意を表す用法では、コーパス参加者、アンケートの被験者の使用語彙には認められなかった。

(4)「案の定」はコーパス参加者の使用例はゼロだったにも関わらず、アンケート被験者の回答には、「適している」「まあまあ適している」という回答が見られた。

(5)「やっぱり」は予期の意味を持つ「案の定」にも、反予期の意味を持つ「図らずも」、「意外に／と」にも置き換えが可能である。

(6)「事実」、「実際」、「現に」の類は、全体的にアンケート結果の点数が高く、特に「実際」を中心として、3 つの表現の中で相互の互換性が高い。
(7)「やっぱり」はどの表現とも互換性が高く、汎用性も高い。
(8) アンケートでは、「やっぱり」と「実際」の使用傾向が極めて類似しているにも関わらず、『名大会話コーパス』の中では「実際」よりも「やっぱり」の方が多くみられ、実際の会話（自然談話）では「やっぱり」を使用する傾向が高い。

6　おわりに

本稿では、自然談話の話し言葉において、「やっぱり」を含む承前性を持つ副詞について、会話コーパスやアンケート調査により、それらの使用傾向や互換性を明らかにしてきた。

その考察の中で、「やっぱり」は「はたして」、「案の定」などの予期の意や、「図らずも」、「意外に／と」などの反予期の意のどちらとも互換性が高く、予期と反予期を両極とした場合に、頻度の観点から、言わば二等辺三角形の頂点に位置することが分かった。

また、「実際」、「事実」、「現に」の 3 つの間での互換性は高く、さらに、これら 3 つと「やっぱり」の互換性も高いことを指摘した。

以上のことにより、本稿では、会話文、特に実際の自然談話において、「やっぱり」が極端に多く用いられているのは、承前性を持つ副詞の間で「やっぱり」と他の副詞との互換性が極めて高いことが一因であることを見出した。

本稿では、川端（1983）に挙げられていた「はたして」、「案の定」、「やはり」、「図らずも」、「意外にも」と「事実」、「実際」、「現に」などの承前性を持つ副詞について考察したが、今後は、さらに他の承前性を持つ副詞についても使用傾向を明らかにしていきたい。また、話者の年齢など、属性による使用差があるのかどうかや世代間でどのような使用傾向があるかについても解明していきたい。

注

1　川端（1983）では、「やはり」と記述されているが、本稿は自然談話を対象としたため、「やっぱ」、「やっぱし」、「やはり」を最も多く出現していた「やっぱり」に含めて表記した。
2　『名大会話コーパス』は、科学研究費基盤研究 (B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（平成 13 年度～ 15 年度　研究代表者大曽美恵子）の一環として作成された、日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。 現在は国立国語研究所に移管され、文字化テキストなどを公開している。
3　R とは、ニュージーランドのオークランド大学統計学科の Ross Ihaka とアメリカのハーバード大学の生物統計学科の Robert Gentleman により開発が始められ、1997 年以降、多くの賛同者によって開発が続けられているオープンソース方式のデータ解析・処理の専用ソフトのことである。詳しくは、金明哲（2017）『R によるデータサイエンス』

を参照されたい。

4　川端（1983）では「意外にも」と記述されているが、本稿では『名大会話コーパス』から抽出された「意外に」や「意外と」も含めて扱い、「意外に／と」と表記している。

5　各会話文の中で、下線の箇所は表 1 に示したアンケート結果の値を各語の前に記号を付けることにより表示している。記号の分類は、◎は 3.5 ～ 4.0、○は 3.0 ～ 3.4、△は 2.0 ～ 2.9、×は 1.0 ～ 1.9 としている。また、丸括弧の前の語は、『名大会話コーパス』の会話文で使用されていた語である。

6　紙幅の都合上、例文は必要最小限の長さに留めたが、実際の分析では、その話題に関するやりとりの全てを確認している。

参考文献

川端善明（1983）「副詞の条件－叙法の副詞組織から－」渡辺実編『副用語の研究』明治書院，pp.1-34.

金明哲（2017）『R によるデータサイエンス』第 2 版，森北出版

原田朋子（2021）「日本語の発話における談話標識の一考察―テキストマイニング手法と目視による分析を通して―」『同志社大学　日本語・日本文化研究』第 18 号，pp.1-27.

――――（2022）「日本語の発話における副詞の意味・機能の弱まりに関する一考察―テキストマイニング手法と目視による分析を通して―」『同志社大学　日本語・日本文化研究』第 19 号，pp.1-28.

――――（2023）「話し言葉における接続表現の意味・機能に関する考察」『同志社大学　日本語・日本文化研究』第 20 号，pp.1-19.

藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子、滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房，pp.43-72.

例文出典

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所，『名大会話コーパス』，https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/